

敗戦

新潟県 田邊 一雄

一 昭和二十(一九四五)年の春

大東亜戦争の戦況が悪化するにつれて、学生に対する兵役義務が強化され始めた。昭和十八年十月には、大学、高専などの法文系学生に対する徴兵猶予が停止されて、徴兵検査が行われることとなり、それに先だって東京の神宮外苑では出陣学徒の壮行会が、盛大に実施された。この日は雨だったが、全国七十七校の法文系学生は、学生服に制帽、ゲートル姿で三八式小銃を担い、それぞれの校旗を先頭に行進して、東条首相の閲兵を受けて勇躍出陣した。

さらに、十二月には徴兵年齢が十九歳に引き下げられ、旧制中学も修行年数が四年に短縮され、軍関係の学校への受験が強く指導された。多くの友人が、少年飛行兵、予科練、そして陸士、陸経、海経、海機など

を受験して、合格した者は一足先に学校を去っていった。残された五年生と四年生は一緒に卒業して受験することになった。

わたしの学んでいた大連中学では、多くの先輩が内地の旧制高校、大学予科、高専などに進学していたので、私もそのような進学を夢見ていたが、二十年になると内地の空襲が激しくなり、更には連絡船が頻繁に沈められて、交通も不自由になったので、内地にある学校の受験は難しくなってきた。そのため満州国立大学か、関東州に所在する学校を受験することになったので、徴兵が猶予される関東州立の旅順医専を選んだ。そうすれば途中で徴兵されることなく、医者資格を得てから軍医として軍隊に入れるからだ。

私は幸いに合格した。不合格者は、大連で内地の学校を受験できることになり、同級生のうちには、北大予科、四高、山口、広島、弘前などの高等学校に行つた者もいた。どこにも入れなかった人は、浪人は許されずに軍属として就職させられた。

二 勤労働員

満州国立大学には日本の制度が適用されなかったで、この大学では四月入学後すぐに授業が始まったが、日本内地の高専、高校、大学予科と、関東州の学校に入学した者は、四月から三カ月間勤労働員に参加することになった。わたしが参加したのは、土城子の飛行場造成作業であった。土城子とは、私は初めて聞く地名だったが、旅順の近くであった。造成中の飛行場では、すでにボーイングB29と同じ四発の飛行機が発着できる長さの滑走路が三本大体できあがっていた。この造成作業には大連、旅順の中学を卒業して旅順工大予科、工大臨教、旅順高校、旅順医専、旅順師範、南満工専、大連経専、内地の高等学校各校に合格した者が参加していたし、中国人労働者も大勢働いていた。私たちは、海軍の飛行兵や予科練生が入る予定の兵舎に寝泊まりすることになった。毎日、ツルハシ・シャベル・モッコを使って滑走路作りの作業が始まった。中国人労働者も一緒に作業した。

みんなは、もう日本にはこの飛行場を使うような大

きな飛行機がないことも知らずに、懸命に作業に打ち込んでいた。学生の作業隊の監督役の教授連はさすがに紳士で、中学校の先生とは違って生徒を一人前と認めてくれて、細かいことで小言を言われることはなかった。

作業が開始されてまもなく、旅順医専生のうち背の低い者は、設営隊炊事要員になって勤労働員学徒の食事を作るようになった。朝早く起こされて朝食を作る作業はつらかったが、滑走路作りの肉体労働よりは楽であった。食事の量は、食べ盛りの生徒たちにとっては十分とはいえなかったので、食事当番の学生が二人組で飯上げにきては、お焦げでよいからくれないかとせがまれることが多かった。

日中の作業を終えた夜、宿舎で作業の疲れや殺風景な宿舎での生活を潤すために、いろんなことが行われた。三中出身の吉岡君のハーモニカの演奏にうっとりとし聞き入ったり、旅中出身の明石君の美声に聞きほれたりした。また、他校出身者のいろいろな体験談にびっくりしたこともあり、娯楽の無い殺風景な夜の一

時を過ごした。ハンモック収容の中二階で、隠れてタバコを吸う浪人グループもいた。ときには他校生ののけんかもあった。たまの休みに大連に帰って映画を観るのが楽しみだったが、作業のある日は旅大線の汽笛を聞く郷愁にかられたものである。

六月には第二国民兵の動員があり、結核で療養していた叔父も召集された。病気のこともあって、配属された部隊はあまり体力を必要としない高射砲隊で、家族はほっとした。

旅順医専の校長は、海軍の向山軍医中將であったが、海軍医委託生の募集があつて私も応募した。受験者は十数人で、旅順の水交社で試験があつた。試験官は、かっこうの良い短剣を腰に着けた軍医だった。私は、服装にあこがれたわけではないが、何となく受けなければいいなと思つた。

三 授業開始

七月になって、やっと授業が開始された。ドイツ語・生理・生化学・解剖・細菌学などの講義と同時に、卒業してすぐ軍医として第一線に出られるように

と、吉浦外科教授の戦陣外科の講義も行われた。また野外での剣道、防空壕掘り、新しくできた関東神宮の参拝行軍などと忙しい日が続いた。宿舎は、学校に近いところにある倉庫を改造した学寮に入寮を許可された。我々一年生は、部屋いっぱいには隙間なく並んだ畳一枚分の広さのベッドと、作りつけの棚だけが各人の領分で、大変窮屈な生活であつた。しかし三年生には別に机が与えられ、卒業を控えて勉強に忙しそうにしていた。一日の課業は起床から始まる。服装を整え、前庭で寮長を中心にラジオ体操をして朝食。授業は八時から始まる。午前中、二時間の授業が二科目、そして昼食だが、食券を使つての外食である。午後の授業が終わつて、夕方寮に戻る。我々の学年は教科書も参考書もないので、寮で今日の授業について、友人とノートを比べ合つて抜けているところの穴埋めをする毎日であつた。教科書も参考書もないので、それしか方法がなかった。土曜は午前で授業が終わるので、すぐに学生服に角帽という出で立ちで、あか抜けたロシア様式の旅順駅から汽車で、大連の自宅に洗濯物持

参で戻った。日曜は、連鎖街、浪速街、西広場辺りを散歩したり、映画を観たり食事をしたりして過ごし、夕方になって旅順に帰るといふ生活だった。

八月九日、ソ連軍が突然に満ソ国境を越えて不法侵入してきた。しかし、旅順にいる人々は、精鋭なる関東軍がいるから大丈夫だろうと思っていたが、伝わって来るソ連軍の侵入速度の余りにも速いのに、私は心配であった。

四 召集発令

八月十二日の日曜、いつものように大連の映画館に入った。しかし、館内では各校の高専生がマイクでひっきりなしに呼び出されていて、映画を観るどころではなかった。そのうちに、我々旅順医専の者も呼び出された。何のための呼び出しなのか分からなかったが、映画館を出たらソ連軍の侵入に伴って、十八歳以上の学生に召集がかかったとのことだった。「木銃持参で大連駅に集合し、新京（長春）方面に向かう」ということだった。私も事態が切迫しているを感じて、すぐに家に帰り支度をして旅順に戻った。寮で

は、同室の二中出身の中村君が既に戻って来て、荷物の整理をしたという話だったが、十八歳未満の者はわずかだった。

翌日、学校では向山校長一人ぐらいが残っておられて、他の教授たちは皆召集されて姿は無かった。

八月十五日には、わずかばかり残っていた学生にも召集がかかり、木銃携行で入隊することになった。校長からは、家族に会うなどという女々しい行動はとらないようにと命じられていたが、入隊すればもう会うことはできないと思い、森本、志賀の両君と話し合っ
て大連に電話して、次の列車で帰った。家では、親類や、後輩、近所の人などが詰め掛けていて、酒とごちそうが用意されていた。壮行会もあつという間に終わり、後輩たちに形見の品を渡した。大正広場の電停まで皆で送ってもらい、そこから万歳の声に送られて大連駅に向かった。父が私に一升瓶の酒を渡してくれた。父は飲みながら行きなさいと言っていたが、父の気持ちに十分に伝わってきた。大連駅で二人と落ち合
い、最終列車で旅順に戻った。父からの酒を回し飲み

しながら、「これで我々の人生も終わりか、短い人生で何も良いことはなかったな！」などと寂しく話し合った。

翌、八月十五日早朝、校庭に整列し向山校長の別れの挨拶を聞いた。すぐに旅順の部隊に向かって前進を開始しようとしたが、正午に重大放送があるので、それを聞いてから入隊するようにとの指示があったので、そのままの隊形で待機した。正午、天皇陛下の玉音放送を整列して聞いたが、ラジオの調子が悪くてよく聞き取れなかった。そのうちに、放送の内容は、無条件降伏の内容と分かり、皆悔し涙を流した。しかしその一方では、精銳関東軍は無傷だから、ソ連軍とはまだ戦いを継続するので、そのまま待機せよ、というような情報も流れた。今まで平穩であった旅順の街の空気が、一遍に変わってしまった。

五 敗戦の悲哀

八月十五日、日本が無条件で連合国側に降伏したことが旅順市街にも知れ渡ると、たちまちのうちに、今まで街中の家々の軒先に立てられていた、日の丸の旗

が姿を消して、その代わりにどこに隠し持っていたのか、晴天白日旗が一斉に揚げられたのには、びっくりすると共に、彼らの変わり身の早さには驚かされた。朝鮮人、満人は、態度をがらりと変えて威圧的態度となり、あちらこちらで暴動が起こった。物価も日増しに上昇してきた。授業もなく、ただ待機せよというだけであった。どこからの指示もないので、学校側もどうしたらよいのか分からなかったのだろう。ただ、学生たちに教務の書類を焼却するようにとの指示があった。校庭で書類を焼却していたら、その中に我々の入学試験のときの合格順位の記録があったが、大連中学校からの合格者では、私がトップであったことが分かって嬉しかった。

このころでも、銭湯や映画館はまだ営業していて、寮友の西村君と入浴後に映画を観に行った。題名は忘れたが、主題歌は「紫煙る新雪の……」という歌であったことは覚えている。だが、数日後には営業を止めてしまった。

昭和二十年八月二十二日、突如としてソ連軍が旅順

に進駐してきた。ドイツ戦線からきたとか、囚人部隊だとかの風評が立っていたので、どんなものか見に行つた。背丈は日本人と変わらない兵隊が多かつたが、子供みたいに小さい者もいた。着ている軍服は油まみれであちこち破れていたが、全員自動小銃を持っていた。戦車がごうごうと音を立てて走つて来る。関東軍の戦車とは比べものにならないほど大きく、中二階から見下ろされているようだ。これを見ると、木銃しか持っていない日本が勝てるわけがないとつくづく思つた。

戦争が終わつたのに、進駐してきたソ連兵の乱暴ろうぜきは筆舌に尽くせないほどひどく、時計、万年筆、金など何でも強奪、ついには所嫌わずに、婦女子に対しての暴行を始めた。ときの細川旅順市長がソ連軍代表のイツノフ将軍に、軍の悪行を即刻止めるように申し入れたが、「敗戦国に処女無し」とすげなく退けられた。中国人の暴動も始まり、夜間には危険で外出できなくなつたが、昼間でもソ連兵がおもしろ半分

いた。

病院にもソ連兵が侵入してきて、病気でほとんど動けないような婦人が強姦されたこともあつた。看護婦寄宿舎も例外ではなく、トラックで乗り付けたソ連兵に襲われてその状況は悲惨を極め、襲われた看護婦の中には自殺する人も出た。

学校は、危険が及んできた付属病院の警備のために学生数人ずつの警備班を編成し、交替で泊まり込むように指示を出した。当然私も警備班の一員になつた。ある日、三年生の大谷さんと、私と、同級生の仲野君、仙洞田君が警備に当たつていたときに、病院の玄関にソ連兵数人が入つて来た。柔道の得意な仙洞田君が、ソ連兵を投げ飛ばそうとして自動小銃で頭を撃たれ、さらに我々にも撃つてきたので一目散に逃げるより仕方がなかつた。仙洞田君は死んだのではないかといううわさが流れたが、その後彼に関する情報はなかつたので、いつとはなく忘れられてしまつた。ずっと後のことだが、引揚げ後名古屋での同窓会に彼が元気な姿を見せたときは、驚いたがとても嬉しかつた。

寮にもソ連兵が二人、自動小銃を構えて入ってきた。「ソ連兵だ！」と叫ぶ声を聞いて一階と二階にいた者は、下駄履きのまま音を立てながら廊下から階段を走って降り、一斉に外に飛び出した。聞き慣れない音に驚いたソ連兵は、空に向けて自動小銃を撃ちながら逃げて行った。

病院前の雑貨屋から、寮生に二人で泊まりに来てほしいという依頼があった。「うちには女子供ばかりでソ連兵が怖いから」というのである。私は黒田さんと二人で出掛けた。夕食をごちそうになり、小遣いまでもらって翌朝寮に帰った。こんな依頼がこちらこちらからきて、寮生は夕方になると依頼先へ出掛けた。

昭和二十年十月六日正午、旅順医専と病院はソ連軍に接収された。旅順・大連間の汽車は動いていたが、一般の人は乗れなかった。列車はソ連軍専用で戦利品や、捕虜の移送に使われていた。工場の機械も、一般家庭の食糧も家具も何から何まで戦利品と称してソ連に移送された。

そのうちソ連軍は、旅順を要塞にするからと言っ

て、すべての日本人に旅順を退去するように命令した。しかし我々には移動手段がないから、寮生四、五人で荷馬車を雇うことにして持ち主と交渉したが足もとを見て高いことをいった。仕方がないから布団、トランク、身の回りの品物などを売って費用をねん出した。私たちは角帽をかぶり、学生服の上に白衣を着て赤十字の腕章をした。何かに役立つだろうと病院からもらった注射器と注射液を携行して、やせて力無くとぼとぼと歩む荷馬車に乗って、旅大道路を大連に向かった。

途中ソ連兵の検問が何か所もあり、その都度隠し持っていたためぼしい物を取り上げられた。どこの検問所であったか、赤十字の腕章を見て病人を診ろという。なんだかよく分からなかったが、もっともらしく痛み止めの注射を打って通過を許可されたこともあった。やっと大連に着いたが、街の様子がおかしい。どの家も玄関や窓に板を打ち付けてひっそりとしていて、街を歩いているのはソ連兵と中国人が少しだけである。ところどころでソ連兵に呼び止められてはまた

没収され、やつのことで家にたどり着いたが、やはり戸締まりがしてある。やつと入れてもらったが、みんな二階の一間にまとまって息を潜めていた。私が兵隊にとられてからは、陰膳を供えていつ帰ってくるかと待っていたところへ帰ったので、みんな喜んでくれた。聞くと、ここでも毎日のようにソ連兵が押し入るやら、中国人が暴れるやらするので、隣組で夜警をしているのだが、四十五歳まではみんな兵隊にとられていたから、残っているのは年寄りばかりであった。私はその夜からすぐに夜警に引き出された。

六 田辺洋行解散

父が経営していた「田辺洋行」では、敗戦当時には約百八十人ぐらいの中国人が働いていた。敗戦となると父はすぐに番頭をはじめ、働いていた中国人を全部集めて、次のようなことを伝えたそうだ。

「田辺洋行の支店の商品と建物は、それぞれの支店で働いている人たちに与える。荷馬車は馬と共に車夫に与える。本店の建物、家財道具、商品、自転車などの一切は、本店に勤務していた人たちにあげるから、

店の名義は番頭さんの名義にしなさい。その代わり私たちが引き揚げるまでは、生活するために商売をしなければならぬので、必要なだけの場所は貸して欲しい」と頼み、聞き入れられた。中国人たちは、店の半分を電気店にしてラジオの修理、組み立てを始めた。このために旅順工大生を四、五人雇った。私たちは、大阪出身の人が作った「浪速みそ」を売ることをはじめた。

敗戦時の父のこの処置が良かったことは、その後に起こったいろいろな災難や、難儀に際して、恩義に厚い中国人たちに救われることになった。何かいちゃもんをつけに、街の中国人たちが店に押し掛けてきて、店の人たちが「ここはおれたちの店だ」と追いついていった。

七 暴動と略奪

ソ連軍は、大連市街に進駐するとすぐに、日本軍の倉庫、大連埠頭にある食糧倉庫、石炭置き場、各工場を片っ端から接収して、そこにある物資、資材をはじめ機械、工具など根こそぎ貨車でソ連領に運び出し

た。接收した施設が多いので、ソ連兵の監視は手薄になつてきた。そこをねらつて現地の中国人が押し寄せてきた。どこになにかあるかということ、一番よく知っているの、監視の手薄なところをねらつて来るのだが、自動小銃を振り回して追い払おうとするソ連兵も、「アリ」か「ハエ」のようにすきをみては群がって襲ってくる中国人の多さに、恐れをなして逃げてしまう。監視兵が逃げた後は、押し掛けた大衆の好き勝手である。手に手に大豆、砂糖、白米など食品、軍服、防寒帽、軍靴、軍手、軍足、シャツなど衣服類のほか燃料なども持ち出した。街ではそれを売る者まで現れた。毎日こんな暴動が続き日本人は戦々恐々としていた。

私の小学校の同級生、出原君の農場も暴民に襲われ全滅したと、知り合いの中国人が教えてくれた。後に日本に帰ってから、九死に一生を得た体中傷だらけの出原君に会えたときの嬉しさは、仙洞田君のとき同様格別であつた。

八 保安隊

このころになると、中国人が日本の三八式小銃を持ち日本の軍服を着て、軍帽の赤い部分に白い布を巻いて晴天白日の記章をつけて保安隊と名乗り「イー、アル、サン、スウ」と掛け声をかけながら隊列を組んで街を行進するようになった。

ある日、大勢の中国人が口々に何か叫びながら歩いているのに出会った。何だろうと見てみると、後ろ手に縛られた一人の日本人が、新聞紙の三角帽と罪状を書いた紙を首の前後にぶら下げられて、市中を引き回されていた。黄金広場まで引き回して、人民裁判が始まった。

「この日本人はこれこれの悪いことをした。どうすればよいか」との問いに、そこに集まっている民衆は「死刑!」「銃殺!」と口々に叫んでいる。「助けろ」などというものはいない。「では銃殺!」「賛成」「賛成」で決まり。十人くらいの保安隊員が三八式銃で射殺。人民裁判はあっけなく終わって民衆は散って行く。この後も、同じように人民裁判に掛けられる日本

人を数回見た。人民裁判は怖い、と心から思った。

そんなある日の夕方、約十人の保安隊員が我が家に来て「隠しているピストルを出しなさい」という。密告があつたのだそうだ。父が、「警防団長をしていたがピストルは持っていない」と言っても聞かない。

持っているのを見たと言って家宅捜索をしたが、しかしあるはずはない。うちがあかないので連行するといふ。隣組の人々が心配して集まってくれたがどうにもならない。店の中国人たちも急を聞いて集まってくれた。そしてだれも父がピストルを持っていたのを見たことはないと言ってくれたが、取り上げられず連行された。しかしどこへ連れて行かれたかだれも分からない。連行された場所を聞き出すにはいろいろが要ると、それぞれなにごしのお金を置いて帰った。数日たつて、以前私の家で働いていた人が保安隊の小隊長をしているのが分かり、父の居場所を捜してくれるようお願いしたら、快く引き受けてくれた。

沙河口警察、大連警察のいずれにもおらず、関東州庁前の保安隊の地下牢にいたことが分かった。町内会

や以前のうちの店で働いていた中国人たちが、釈放嘆願書を持って一緒に保安隊を訪ねてくれた。もちろんいろいろも忘れなかった。私だけ別室に來いという。部屋に入ったらゴムホースでたたかれ、ピストルのある場所をはけという。二、三時間もそんな状況が続いて、どうなるかと心細くなったところに、「出ろ」と言われた。一緒にきてくれた中国人の証言や、いろいろが効いたとみえて、父も一緒に釈放された。父は毎日拷問を受けてやつれていたが、みんなうちへ帰り、無事を祝って焼酎で乾杯した。

九 露店と軍票

戦争に負けた日本人は働く場所が無くなり無収入となったところへ、国共内戦が影響して、大連の物価は日増しに高くなっていった、生活は大変だった。そこへ、ソ連兵が麻袋いっぱい軍票を持ってきて、品物売れという。日本人も中国人もいやがったが、ソ連兵は軍票を受け取らないものは処罰すると布告した。だが、同じ百円でも日本円、朝鮮銀行券、満州銀行券、ソ連軍票それぞれの相場があつて、ソ連軍票の価

値が一番安かった。ソ連兵を赤旗を振って歓迎した中国人も、そのうちに「大鼻子」と馬鹿にし始めた。日本人は、今まで大切に持っていた衣類、家具、本をはじめ菓子、タバコ、砂糖などを露店で売って現金を得て、その日その日の生活費を賄っていた。私も、父が大切にしていた「日本文学全集」「世界大思想全集」を並べて売ったが、結局は二束三文であった。電停前とか、市場の前とかの人通りの多くよく売れる場所は、全部中国人が占めていて日本人は入れてくれなかった。結局、その周辺で必死になって売るしかなかった。

大連中学から山口高校に合格していた岡君が、「アルコールはあるが、瓶が無い。何かないか」と言ってきたので、裏の倉庫を探したら、ワインやウイスキーの空瓶が積んであった。「あったよ！」と連絡したら、すぐに取りに来て、「これに入れたら高く売れるよ」と言って、大喜びをして帰った。また、撫順から医専に入った田中君は、豆乳を作って売りたいが、台を預かってくれる所がないというので、私の店で預

かることにした。彼は朝早くから店に来て支度をし、近くの街角で勤め人に売っていたが、これもよく売れていた。いずれも、生活の糧を得ることができて喜んでくれた。商売といえは、このころから街角に立ってソ連兵に媚びを売る女性たちの姿を見るようになって。貞操の固い日本の女性というイメージがもろくも崩れて、悲しい思いをしたものだった。

十 医専の授業再開

日本人小中学生は、接収を免れた学校に集まって、日僑小中学校となり勉強を続けていたが、高専大学は廃校になっていた。しかし旅順医専の教授たちは、生活苦にもかかわらず授業再開の許可を得て、大連商業の校舎を使って授業を開始した。これは、敗戦後に外地で開講した唯一の高専であろう。教授たちは苦労しながら生活をし、一日おきに授業を続けた。学生も一日勉強したら、翌日は働くという毎日だった。一年生は解剖、整理、細菌、薬理などを学び、実習も真剣にやった。試験も厳格に行われ、生活が苦しいからといって、仕事をして授業を受けなかった者でも、そん

な事情は考慮されず、六十点以下の者は容赦なく追試を受けさせられた。二年生に進級できたのは七〇％くらいであった。また、ハルビン医大、京城女子医専、旅順高校の学生ら数人が、一緒に授業を受けた。この間、学生たちの生活費の一助にと文芸部主催「旅順医専学生救済公演」と銘うった公演が、昭和二十一年八月十六日から四日間盛大に開かれた。また、土気高揚のために四月から十一月にかけて高専大学対抗野球大会が行われ、旅順高校と医専が決勝戦に進み、医専が優勝、苦しい生活に潤いを与えた。

昭和二十一年十一月までこんな状況が続いたが、やがて引揚げが始まり、それぞれ修業証明書をもらって閉校となった。教授たちは閉校にあたり、いずれ九州のどこかで旅順医専を再興させたいと言ってくれた。また、向山校長は在籍者名簿、成績表、卒業証書をリュックサックに詰めて引き揚げ、その後外務省に引き渡し、卒業生、在校生の引揚げ後の身分証明に貢献した。

十一 母の病気

露店に店を出して頑張っていた母が、高熱を出し食事がとれなくなり、ついにはうわごとを言うようになった。中田先生に往診してもらったが良くなり、脳膜炎を起こしている助からないと言われた。父は思案にくれていたが、旅順医専の望月精神科教授が聖徳街で開業していたので、わらにもすがる思いで往診を頼んだ。教授は母を診てすぐに、「これは発疹チフスです」と診断され、朝夕の注射の仕方を教えてくれた。そして大連日赤の伝染病棟に入院させてもらいなさいとのことで、早速日赤に行ったら、学而寮と一緒にいった大谷さんや猿渡さんがおられて、すぐに連れて来なさいと引き受けてくれた。大勢の患者でごった返しているなかを入院したが、人手が足りないから手伝うようにと言われて、父と交代で一日おきに看病することになった。病院には栄養失調でやせ衰えた人が大勢いた。

十二 労働組合

街の大通りには、スターリンと毛沢東の大きな額が

かかっていた。また日本人労働組合の人たちが赤腕章をして、ソ連と中国の威を借りて威張りだし、「反動政府、吉田内閣打倒」「我らの敵、ファシズムを我らの国から追い出せ」「人道主義の仮面をかぶった米鬼を追い出せ」などと言ってまわり、日本語新聞もソ連の検閲を受けて発行されていたので、記事は日本共産党の活躍とか、日本の食糧難や就職難の様子や、外地の日本人がいまだに帰国できないのはみんな日本の政府が悪いのだなど、日本の悪口ばかりの記事が目立った。

夜は、昼間の疲れを休めたいが、共産主義思想をたたき込まれる時間があつて、少年部・青年部・婦人部・壮年部などに分けられ、グループ毎に洗脳された。指導者は日本人の中から選ばれた者であつたが、この集会に出ないと反動分子としていろいろな面で見められた。また、集会に出て共産主義礼賛の話が始めれば、区切りごとに「同感」「賛成」と叫ばなければ「反動分子、帝国主義者」とののしられ、にらまれる。意に沿わないと、ソ連兵や中国人に密告され痛め

つけられた。後で分かったことだが、この指導者たちは日本人をいじめて、集めた金品を私物化して豪勢な生活をしていたらしい。

十三 青少年義勇隊員

ある日、菜っ葉服を着て戦闘帽をかぶった少年が一人やってきた。「ソ連軍の侵入で仲間は殺されてしまい、私だけがやっと思ひました。助けて下さい」と言った。父は気の毒に思い、息子が一人増えたと思えばよいことだと引き受けた。翌朝、私たちが起きたときには少年は掃除を始めていたので、さすが青少年義勇兵だと思つた。父は、私たちの衣類から少年に着替えを与えたり、食事も私たちと同じにした。時々仲間と連絡すると言つては、三十分くらい出掛けることがあつたが、後はよく働いていた。三週間くらいいたところ、家族みんなが起きたのに少年の姿が見えない。妹が朝食を作ろうとしたら、いつも置いてある場所に食糧がない。調べてみると、お金や、防寒具などが無くなつていた。信用していた義勇隊員の持ち逃げだつた。それでも、父は無事に引き揚げてくれればと

同情していた。

十四 引揚げ

昭和二十一年十一月から待望の引揚げが始まった。

引揚げの順番はいろんな点から決められたが、「お先に内地で会おう」と、引き揚げて行く者が声を掛けるので、「お元気で」と答えたものの、残る者の気持ちは複雑であった。

周りの人々が次から次と引き揚げ、残った日本人の方が少なくなってきた。その年は大連で年越しをすることになった。翌、昭和二十二年二月、「十時までに下藤小学校に集合するように」との連絡が入った。一人が持てる荷物はリュックサック一つである。こんなこともあろうかと覚悟はしていたが、集合までに後一時間ほどしかない。用意していたリュックサックを背負い、母は幼い弟妹の手を引いて下藤小学校に向かった。今まで使っていた身の回りの品物は、全部うちで働いていた中国人たちで分けるように伝えて別れた。小学校には、一緒に帰る人たちが集まり始めていた。やがて点呼をとって引揚者がそろったのを確かめ、用

意されたトラックに乗って埠頭に向かった。埠頭ではソ連兵が荷物の点検を始めていた。「お金は日本に着いたらもらえるから全部出さない。写真、本、記録などは駄目」と細かい注意が続く。そのときソ連兵に連れられて、うちで働いていた中国人が私たちを訪ねてきた。「ソ連兵にいろいろを渡してやると会えた」と言って餓頭や中国菓子を手渡してくれた。いろいろが効いたのか、ソ連兵は私たちの検査はせずに早く行けと船の方へ押しやった。義理堅い中国人に礼を言いなから、お互い手を握って別れを惜しんだ。

私たちは、「第二大拓丸」という船に乗船したが、いくつかに区切られた船室の天井は、中腰にならないと歩けないほどの高さしかなく、私たちは荷物と一緒にぎっしりと詰め込まれた。今一度大連を見たいと思ったのと、ひとときでも窮屈さから逃れるために甲板に出てみたら、埠頭にいるソ連兵が自動小銃を構えて船の方をにらんでいた。

昭和二十二年二月二十七日夕刻、船は静かに岸壁を離れた。離れて行く大連埠頭を眺めている人々の目に

は涙があった。船内のスピーカーから「今、大連を離れました。ご苦勞様でした。もうあなた方をいじめる人はだれもいません」と放送された。みんなはほっとする思いであった。

甲板の方が騒々しくなった。何かかと思えば、そのうちに大きな荷物を持って「おれが引揚者の指揮をとる」と言って、威張りながら最後に船に乗り込んできた労働組合の幹部たちが、つるし上げられていたのである。かつてこの幹部たちに密告されて、保安隊にいじめられた人々がうつぶんを晴らしていた。

しばらくして「この船にお医者さんは乗っていませんか。おいでになったら救護室までお越し下さい」という放送があった。母から促されて、ぎっしりと詰まった居住区の人々をかき分けて、急いで救護室に行った。救護室には学生同盟の九大医学部学生が一人いた。「乗員全員への予防注射をするので手伝ってほしい」と言う。私は即座に「手伝います」と返事をした。結局二人だけだったので、一人で千六、七百人に注射をすることになり、大変な仕事だった。この

船が日本に着くまでに終わらなければならぬので、早速に始めた。私は白衣一枚を持っていたのでそれを着て、仕切りも何もない船室中央の広場で注射をした。

船内では、船員による歓迎の余興が始まり、みんなの顔にもやっと安堵の色が浮かんだが、こっちは注射、注射の連続で大変だった。ただその反面、救護室で伸び伸びと休むことができ、食事もうしぶりに白米の飯に味噌汁、たくあんで満足した。気が張っていたので、小学生時代のように船酔いの苦しみはなかった。

三月三日、佐世保に上陸した。この日の佐世保は暖かかった。人も荷物も、DDTを吹き付けられて消毒されてから宿舎に案内された。そこで、労働組合の幹部数人が玄界灘に放り込まれて、行方不明になったという話を聞いた。また、一便前の船で、上陸した親類の西沢さん一家に会えた。付近の農家で焼き芋などが買えるというので、宿舎を抜け出し、隠し持っていた五十銭札で買って、みんなと食べておいしい思いを

した。

引揚げ諸手続きに数日かかり、やっと帰郷先に向かつて南風崎駅を出発した。原爆の被害がまだ生々しい広島を眺め、大阪から北陸本線に乗り換えた。途中から一面の雪に覆われた真冬の光景に変わったのに驚きながら、郷里の長岡に着いた。そして長岡で、引揚者としての苦難な生活が始まった。

十五 引揚者の生活

父の実家にやっとたどり着き、座敷で荷をほどいた。何とか日本には帰って来たが、さてこれからどうすればよいのか？ 思案投げ首の毎日となった。座敷を占領しているのも気が引けるので、家の前にある納屋の二階を空けてもらって移り住み、村役場などから支給された鍋釜で、家族の生活を始めた。しかし、一家十人では生活費もかさみ、引揚げのとき佐世保で支給されたお金も、たちまち少なくなってきた。働かなければと、父と私は今まで経験したこともない、農協のむしろを梱包する作業をして、わずかばかりの生活費を稼いだ。この作業はまさに肉体労働で、仕事が終

わると疲れて寝るだけの生活だった。

四月には、弟と妹がそれぞれ学校に通い始めたし、五月には弟が生まれて、私を頭に九人の兄弟となった。そのうちに、妹二人は世話する人があって鐘紡の仕事に出た。後には上の妹は幼稚園の先生になり、下の妹は看護学校に進んだが、それまでは鐘紡で働いて家計を助けてくれた。

旅順医専の同級生だった野村君が、旧制富山高校の理乙に入り、私にも誘いがあった。三野君も金沢医大に転入し、松本医専には花井・宮沢・飯山の三君が、二年生に転入したという情報が次々と入ってきた。私も復学したいという気持ちでいっぱいだったが、生きていくだけでやっとの家の状況では、なかなか言い出せなかった。しかし、このままの生活を続けていたら、ただ生きていくだけであって将来への展望は何もなかった。「勉強をしたい。復学したい」という私の気持ちはどこから洩れたのか、親類一同から「大勢の弟妹の生活はどうなるのか？」とか、「長男が働かなくてどうするのだ」と、猛然と反対された。そう言わ

ればそのとおりであり、私も半ば復学をあきらめる気持ちにもなっていた。だが、両親と妹たちは、「後とは何かするので勉強しなさい」と、受験を勧めてくれた。その気持ちは非常に嬉しく感謝したが、さてこれから受験勉強をするにも本も無い。希望校は京都大学だったが、汽車の切符も割り当てて入手できない。それに何よりも肝心な汽車賃も無い。すると父は、黙ったまま自分のリュックサックから背広を出して、「一緒についてこい！」と言って外に出た。父はその背広を古着屋に売り、汽車賃だと言って渡してくれた。嬉しかった。涙が出た。と共に今の境遇が情けなかった。

十六 復学

いろいろと考えた末に、新潟医大を希望することとした。新潟医大の教務部長が、「戦争が終わり、今までの短縮された教育制度は、正規の教育に戻る。医学部は四年制、医専は五年制になり、更に卒業後一年間のインターンがあり、それから国家試験に合格して、初めて医師となれるのだ。これからの医師は、みんな

正規の教育を受けて世に出ることとなる。アメリカ医学が入り、医学は進歩する。今までの教育では駄目だ。新しい時代に生きていける医師になるために一年生からやり直せ」と言われた。私はその言葉に従って、一年生を受験し無事に合格した。しかし生活するために、昼間は学校で学び、夜間と土日は働くという生活が始まった。長岡にいる家族も苦しい毎日の生活を頑張っているのだと思いながら、私も頑張った。苦しいが、夢が出てきた。こうして復学の第一歩を、だれ一人知る者もない新潟の地で、無い無いづくしの生活が始まった。

夢と懺悔ざんげの開拓行

愛知県 清水 清

一 私の渡満事情

私は、昭和五（一九三〇）年八月、群馬県赤城山南麓で、自作農の清水圭太郎の四男として生まれまし